

「製版機はなあ、タイプとちがって、キイをおさえてからペダルを踏むのや。それからなあ、もう一つ注意してほしいことは、亜鉛板なので間違うとあとが面倒や。ゆっくりで良いから間違いを少なく打つようにな」といわれながら、点字製版機の操作を指導されたのは、もう十七年も前のことである。

人生のしかも前半、十五歳から二十二歳までの八年間のなかで、二度までも死を覚悟した発病（ハンセン氏病）、そして両眼失明の日から現在の私を形成してくれたのは、点字の習得であった。

療養所への入所、そしてまもなくの失明というどん底にもだえ苦しんでいた私に、点字の習得をわがことのようにすすめてくれる友だちの熱意を無にしてはという気持と、「棒ほど願って針ほど叶う」のたとえを信じて、誰ひとりも習得しえなかった点字講習場へと飛び込んだのであった。

そして一か月余、わずかに残っている私の指先で、点字の文字を読みとることのできた瞬間の感激は、誰しもが同じであったろう。周囲もはばかりらず、大声をあげたものだった。それもそのはず、指先ではなく舌先や唇で、同期生三名が前日習得していたからである。

不可能とまで伝えられきし点字の 習得なりぬ舌くちびるに

これは当時の心境を詠んだものである。それまでは、くる日くる日をどれだけ長くつらく無気力にすごしていたことだろう。ぼんやりとそれは、ただ生きていくだけでしかなかった。

ひとりでは一步も歩くことのできない自分が、今後多くの先輩たちのように、杖音高くひびかせて、医局に浴場に、また友だちの寮にと、自由自在に歩けるようになるのだろうかなど、先行きを考えると、ますますみじめさがつのるばかりであった。

それがどうだろう、点字を習得するや一変したのである。無気力そのものの明け暮れは、短く楽しく活動的となって、それは死から生への急変そのものだった。

このように画期的な点字習得を記念して、機関誌発刊が決定され、私もその一員として参加し、はじめてみずからの手でものを生みだす喜び、すなわち生き甲斐というものを知ったのである。

当初は一字一字をこつこつと打ち重ねたのであるが、五号からは製版機が導入されて、発行部数も百三十部に増大する。一方、作業も容易となったのであるが、その製版機の操作を担当したのが私であり、それは今もなお続いている。

はじめのうちは不慣れなこともあって、肉体的にも精神的にもかなりの疲労をおぼえたが、慣れるにつれて、それは快い疲労というか、楽しい労働となったのである。とにかく私にとっては、この時だけが唯一の作業であり、働く汗でもあるからである。

これも毎号毎号、北は北海道から南の沖縄はもちろん、台湾、韓国までの多くの人々の手や眼に触れるのだと思うと、製版機のペダルを踏む足にも、おのずと力がこもるといえるものである。

数の少ない字は軽く、多い字は強くなどと前回より今回、今回より次回が少しづつでも良くなることを心がけながら、油のしみこんだ印刷室は読み手との呼吸もあって、私が踏む機械音が、ガタンガタンと快く響く。体に疲れを感じても、力の続くかぎり、あのどん底にもだえ苦しんだ日の、たとえようもない悲しみをくりかえさないためにも、製版機のペダルを踏み続けよう。